

震災から二年を経た今、三陸沿岸の巨大防潮堤建設への関心が高まっています。景観・維持管理費用や防潮堤があることで過信し、津波が来ても逃げなくなる一などさまざまな観点から議論されています。

私はもともと、防潮堤のことは全く知らなかったのですが、昨年夏の個人旅行で初めて岩手県大槌町を訪れた際、現地の方々と語らう中でこの問題を知りました。

ちよつど住民有志が集まり、なかなか建設が始まらない防潮堤の計画見直しを訴えるための「住民によるまちづくり会

ファシリテーター
加生(かしょう)
健太朗さん



東北復興日記

86

防潮堤計画対話の場を

議」の開催準備がされていくところでした。事務局長から「震災から二年半たった今、君のような外部の視点が必要だ」とお誘いを受け企画することになりました。

その後、私は個人とし



会議は昨年十一月に、地元住民やNPO関係者や町など、さまざまな方が町内外から約百八十人立ち上げ等に関わってきました。

行政側も計画の見直しには、国や県との複雑な調整が必要で、また全体の復興計画へ影響を与えるため、ただでさえ忙殺される中で、要望に応じるのは難しいことも理解できました。

この半年を通じ、この問題の本質的な論点は「震災後に十分な議論の時間を持つことができないまま決まった計画を、再度検証し議論し直すに

はどうすればいいのか」ということだと感じています。そして、これは被災地だけの課題ではなく、これからの日本の新しい合意形成のあり方を問うことでもあります。

今、まず必要なのは、住民と行政の対話の場づくりです。その要望を行政に出していますが、いまだ設けることができていないのが現状です。最終的には住民投票の実施が鍵だと思っています。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。